



沖縄のグスクと韓国の邑城

奈良文化財研究所名誉研究員 木全敬蔵氏



写真1 糸数城跡の東側石垣

沖縄県南城市玉城町に所在する糸数グスクの整備事業に関わって先ず疑問に思ったのは、南のアザナ（見張り台）と言われている城壁から突き出した施設（写真1）の役割であった。写真の奥のものは、中国では馬面、韓国では雉（ち）と言われて城壁が直線状に築城されている時、城壁に取り付く敵兵を側面から攻撃する役割を持った施設と考えられる。しかし手前のものは突き出した部分に石が詰められていなくて、雉とは考え難い。色々考えた末、韓国の慶州文化財研究所で頂いた、同所の年報に出ていた長髯邑城の平面図にある西門跡の形に似ていることを思い出した。糸数グスクの場合も門の出入り口を塞いだものではないかと考え、韓国の邑城とグスクの比較することを始めた。邑城の築城目的は明瞭に倭寇の侵略から住民を保護することである。14世紀後半倭寇の跳梁に手を焼いた高麗は国力が衰え朝鮮にその地位を追われた。朝鮮王4代の世宗は、対馬に侵攻して倭寇を攻撃するなど倭寇対策に力を注ぎ、『築城新図』という築城テキストを作成、監督官を地方に派遣し、邑城の築城に力を注いだ。

邑城の模式図（図1）が示すように、倭寇が侵入してきたら、住民を城内に引き入れることが出来る広さ、十分な飲料水の確保が第一条件になっている。また城壁の家畜を養うスペースをとって、

その外側に、濠をほり防衛線を2重に構築した。

倭寇が大暴れしている時期沖縄では、各地の豪族が勢力拡張の戦いがはじまり、北山（今帰仁）、中山（首里）、南山（糸満）の3山時代を経て、15世紀に尚氏によって統一された。即ち邑城とグスクは殆ど同じ時代に全盛期を迎えたようである。

グスクには住民を保護するという思想に欠けている。これは沖縄だけでなく日本に城郭すべてに当てはまる。築城の思想の違いはあっても石を築き上げる技術に邑城とグスクに類似点が数々見られる。



図1 邑城の模式図（孫博士原図）

ソウルを囲むソウル城郭は朝鮮王朝を築いた太祖の時代に築城され、その後世宗時代、肅莊時代の2時期に大きな修復事業があった。従って太祖時代の石積み、世宗時代の石積み、肅宗時代の石積みの特徴を見ることが出来る。いずれの時代の石積みに共通するのは、最下部の石はその上部のどの石より大きく、上部の石積みを支える基盤の役割をして、地台石と呼ばれている。地台石は前面が上部の石積みの面より少し外側へ突き出して据えられている。

グスクにおける地台石の例は、糸数グスク正門城内側門柱の下部（写真2）に見られる。この場合地台石は3層になっているが、邑城にも同じよ

うな例がある。



写真2 糸数グスクの地台石の例



写真3 下部は布積み、上部は野面積み

写真3は糸数グスクの正門付近の城壁である。下部が布積み、上部が野面積みになっている。城壁本体は野面積みで、上述の雉又は雉状の構造物は布積みになっているので、築造当初は野面積みで、改築、又は増築時に布積みを採用し、野面積みの城壁面を布積みで化粧したが完成前に状況が急変して化粧が間に合わなかった、と考えた。ところが邑城にもこのような例があるので、化粧と言うより、石積みを補強する為の補築と考えるのが妥当ではないかと考えるに至った。雉の裾部には明瞭に補築が見られる。(写真4)



写真4 雉の先端に補築



写真5 左・楽安城の階段、右・糸数グスクの階段痕跡

城壁の天端は守備兵の活躍の場であるから、邑城では門の城内側両脇に城壁の天端に登る階段がついている。グスクでは首里城の正門である歓会門の脇に階段が付いているのが唯一の城壁天端に登る幅広階段例である。楽安邑城には人一人が通れる幅の狭い階段の例(写真5の左)がある。そして糸数グスクの正門近くで発見された遺構(写真5の右)は楽安邑城に見られる階段と同様一人用階段の痕跡であると考えて間違いないようである。

邑城の甕城のように門を守る施設はグスクにはない。冒頭に述べた写真手前のアザナが、楽安邑城の東門の角型甕城(写真6)と同様のものでは、グスク遺構唯一の門を守る施設ということになる。



写真6 楽安城東門の角型甕城

以上述べたこと以外にもグスクと邑城の石積の技法に類似点があり、沖縄と朝鮮半島の間には技術の交流があったと想像をしている。さらに研究を深め、それを立証したいと思っている。

糸数グスクの写真は南城市教育委員会西平氏からの提供、韓国の石積技術については、元韓国文化財管理局文化財補修課長孫永植工学博士の指導を受けた。また、小林和夫氏にスライド作成をお願いした。